

第3章 コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは持続可能な開発目標「SDGs」を共通テーマとし、多様なバックグラウンドを持つファシリテーターたちにより、4つのコースが実施された。参加青年は各ファシリテーター主導の下、各コースに関するディスカッションを行い、テーマに添った世界的課題について理解を深めるとともに、他の参加青年の意見を通して参加各国の現状や取組について学んだ。また、各分野に精通する有識者の講義を受けた。3回のセッションを通して、参加青年が自ら行う社会課題解決のための取組を見付け、その実現に向けた具体的な計画を組み立てることをねらいとした。令和4年2月12日に実施された成果発表では、PYが自主的に発表方法を整え、ディスカッションでの学びを成果として全体に発表した。



社会問題コースのファシリテーター
Ms. Ahmareen Farah



ジェンダー平等問題コースのファシリテーター
Mr. Eugene Cubilla Sosing



経済問題コースのファシリテーター
Ms. Aida May Bergado-De Guzman



環境問題コースのファシリテーター
Dr. May Ali Khalfan

1. 社会問題

ファシリテーター：Ms. Ahmareen Farah（オール・ポイント・リロケーション社、カウンセリング部門コンサルタント）
PY：21名

（1）ディスカッション分野

社会問題

（2）ディスカッションの目標とねらい

- a. すべての子どもの権利を尊重することを学ぶ
- b. 子どもたちを犯罪、ネグレクト、搾取から守る
- c. 社会、法律、政策立案者が児童保護を実践するために役立つルールを起草する

（3）事前課題

個人課題

参加青年には以下の事前課題が与えられた。

- a. セッションに期待することをまとめておくこと。
- b. 児童保護に関する国連条約の文書を読んでおくこと。
- c. 国連条約の利点についての質問に回答し、セッションの開始前に提出すること。

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Ms. Humna Rehan・学生、ラホール・グラマー高校（イスラマバード）生徒会副会長、パキスタン・リザーブ・ディベート・チーム2021

要旨

講演は、まず法律的・社会的に使用されている「子ども」の定義を確立するところから始まり、社会的に若く、脆弱で弱い立場にある人たちに対して作られた力関係について探求した。また、子どもたちの政治に対する発言権のあり方についての「youthocracy」という概念を紹介した。これは、子どもの状況を改善する制度を通して、社会変革につながるものである。また、栄養失調や児童労働など、世界の子どもたちが影響を受けている課題についても触れた。さらに若者の視点を法律の制定に反映させるため、議会に若者の枠を確保すべきであるという急進的なアイデアについても語られた。

基調講演から学んだこと

- a. 若者を意思決定の場に参加させるべきであるということ。
- b. 変化をもたらすためには、社会の弱者層が主体的に行動する必要があるということ。

コース・ディスカッション I

ねらい

- a. 子どもの権利とは何かを理解する。
- b. 児童保護の重要性を理解する。
- c. 子どもの身体的・精神的なウェルビーイングと児童保護を関連付ける。

活動

- a. チャット欄に参加者がそれぞれ自分に関する何か面白いことを書き込むという、従来とは違ったスタイルでの自己紹介を実施した。
- b. 事前課題に基づき、このセッションに期待することについてのディスカッションを行った。
- c. 「子どもの権利とは何か」という問いに対し、参加者がそれぞれ子どもの権利について思い付く言葉を一つずつチャット欄に書き込んだ。最後にその結果を表示し、ディスカッションを行った。
- d. 「身体的なしつけは重要だと思うか」というトピックでディスカッションを実施した。異なる文化的背景を持つ参加者たちが集まっていることから、しつけに対する許容範囲はそれぞれ異なっていることが予想された。ブレイクアウトルームに分

かれて話し合い、代表者がそれぞれのグループでまとめた意見を発表した。

- e. 罰を与えることが、子どもにどのような影響を与えるかについてのビデオを視聴した。その後ディスカッションを実施し、それぞれの経験を共有した。

成果

- a. 18歳未満の全ての人たちを子どもと定義することで意見が一致した。
- b. 体罰に関するビデオから、身体的、精神的に厳しい罰を与えることが、子どもの人格を傷つけ、結果として、子どもは大人に対して不信感を抱くようになり、子どもの自信を損なうことにも繋がることが分かった。

コース・ディスカッション II

ねらい

- a. 国連やその他の国際機関が子どもの権利のために果たす役割を理解する。
- b. 国連の児童の権利に関する条約を理解する。

活動

- a. 始めに全体で前回の振り返りを行った。
- b. 児童保護に関するグローバルな目標についてのパワーポイント・プレゼンテーションを共有した。
- c. 参加者が事前課題として予習してきた、国連の児童の権利に関する条約の中から子どもの権利について取り上げ、どのようにして各目標を達成するかについてのブレインストーミングを実施した。また、フィードバックを元に、ブレイクアウトルームに分かれたセッションをさらに追加した。ブレイクアウトルームでは、子どもの権利を阻んでいるハードルに対する解決策についてのディスカッションを行い、その後全体でディスカッションの内容を共有した。
- d. 国連条約の役割に関するビデオを視聴した。
- e. 「自分の国でこの条約がきちんと守られているか、また、守られていないとしたらその理由は何か」という問いに対し、参加者は再びブレイクアウトルームに分かれて有意義なディスカッションを行った。ディスカッションの結果は各グループの代表者から全体に共有された。

成果

- a. 子どもを守るために国際機関が担う役割について、そして、全ての国が守るべきグローバルな目標について学んだ。
- b. それぞれの国でこれらの法律がどのように施行さ

れているか、また施行されていない場合はその理由は何かについて意見を交換した。

コース・ディスカッションⅢ

ねらい

- 社会で起こっている子どもに対する犯罪についての認識を高める。
- いじめの概念を明確にする。
- 犯罪やいじめに対処する方法や、社会、メディア、法律が担うべき役割を明らかにする。

活動

- 前回の振り返りを行った。
- ブレイクアウトルームに分かれ、自分たちの社会における子どもに対する犯罪にはどのようなものが挙げられるかを話し合い、その結果を全体で議論した。
- インターネット犯罪に関するビデオを視聴し、内容の振り返りを行った。
- パワーポイントプレゼンテーションを用いて、子どもに対する犯罪の種類について共有した。
- いじめに関するビデオを視聴した。その後、実際にいじめを受けたことがあるかどうかについて、参加者がそれぞれの経験を共有した。また4つのグループに分かれ、学校、社会、メディア、法律ができることについて話し合い、各グループの代表者が結果を共有した。

成果

- 児童労働、児童婚、児童売買など、子どもに対して行われる犯罪について学んだ。
- なぜいじめが起こってしまうのか、そしていじめは被害者にとって生涯のトラウマとなってしまうということを学んだ。
- 子どもたちの状況を改善するために、法律、メディア、社会が果たすべき役割について思案した。

(5) ディスカッションの成果発表

プログラムの最後には、各ディスカッション・グループがそれぞれのコースについてのプレゼンテーションを実施した。社会問題コースの参加青年から、まず18歳未満の全ての人を子どもと定義付けることが述べられた。スライド発表では、3つのセッションから得た成果を以下のとおり全体に向けて発表した。

- 体罰を与えることは、子どもの幼少期を台無しにし、人格を傷つけることから、いかなる状況で

も避けるべきであるという結論に至った。体罰によって子どもは大人に対して不信感を抱くようになり、子どもの自信を損なうことにも繋がる。

- 児童労働、児童婚、人身売買など、子どもに対する犯罪については、黙って傍観するのではなく、積極的に阻止していかなければならないということ学んだ。
- なぜいじめが起こってしまうのか、そしていじめは被害者にとって生涯のトラウマとなってしまうということを学んだ。また、子どもたちの状況を改善するために、法律、メディア、社会が果たすべき役割についても思案した。
- 子どもを守るために国際機関が担う役割について、また全ての国が守るべきグローバルな目標について学んだ。
- それぞれの国でこれらの法律がどのように施行されているか、また施行されていない場合はその理由は何かについて意見を交換した。

(6) PYの声

- ディスカッション・セッションを通じて、二つの驚きがあった。1日目に体罰について話し合っていた時のことである。私個人の意見では、子どもが言うことを聞かずに危険が及ぶような状況であれば、最終的な手段として子どもに手をあげることは、ある程度許容される場合もあるのではないかと感じていた。しかしスウェーデンでは、いかなる状況であっても体罰は許されていないということを知り、国によって考え方は大きく異なるのだということを実感した。短い時間だったが、ファシリテーターや他の参加青年から多くを学ぶことができ、とても素晴らしい時間を過ごすことができた。また、教育についての知識を深めることができた。この3日間を決して忘れない。本当にありがとうございました。(日本)
- ディスカッションはとても洞察に富んでおり、多くの新しい視点を知ることができた。パンデミックにより直接会うことはできなかったが、多様なテーマについて、まるで同じ場所に集まったかのように議論することができた。また、自分のリーダーシップの在り方について考える良い機会でもあった。最後に、素晴らしい場を作ってくれたファシリテーターに感謝を伝えたい。(日本)
- 社会問題のセッションは、時事問題、特に子どもの権利について考える上で非常に有意義なもので

あった。国連の児童の権利に関する条約について多くを学び、小グループでさまざまな問題について議論することができた。他国の人たちとこれらの問題の解決策について話し合った時間はとても充実したものであり、世界で起こっていること、特に子どもについて考えることがいかに重要であるかを知ることができた。ファシリテーターは、様々な質問で私たちを啓発し、私たちにとって素晴らしい経験になるようセッションを導いてくれた。(ポーランド)

- 他のディスカッション・グループの参加者と話したところ、我々のグループは個人の交流の機会が最も多かったということが分かり、それがとても素晴らしいことであったと感じた。ファシリテーターが意見を取り入れながら、ディスカッションの内容を調整してくれたことが非常にありがたかった。(オーストラリア)
- ディスカッションの経験を通して、オマーンでは個人、社会、民間、政府機関などが、あらゆる手段を駆使しながら、この問題に真剣に取り組んでいるということがよく分かった。オマーンが、子どもたちの権利を尊重し、親が子どもたちのために安全な環境を保つ国としてのモデルとなっていることを誇りに思う。世界は完璧な虹のようになることはない。決まったフレームワークに誰もが納得して従うような世界を作ることはできないのである。一方、個人としては、将来子どもたちを安全な環境で育

てるにはどうしたらよいかを常に考えなければならぬとも感じている。私たちは、自分たちで変えられることから小さな一歩を踏み出し、取り組んでいかなければならない。私たち一人一人が小さな目標を積み重ねていくことで、SDGsを達成することができると信じている。(オマーン)

(7) ファシリテーター所感

児童保護とは、暴力、搾取、虐待、ネグレクトから子どもたちを守ることである。国連の児童の権利に関する条約第19条では、家庭内外での子どもの保護について定められている。こうした子どもを保護する制度に加え、国連のSDGsの4番目にある「質の高い教育」を提供することも、子どもを守るための手段の一つである。その重要性を鑑み、私は青年たちにこのテーマについて学んでもらうことにした。

総じて、とてもいい勉強になった。初めはZoomの機能を全て熟知していないことに対して不安を感じていたが、日々新しい機能を学ぶことができた。事務局の助けもあって3日目にはずいぶん慣れ、全て順調に進んだ。セッションに与えられた3日間という時間はあっという間で、ようやく距離が縮まり始めたころにはもう終了してしまっただよ感じた。これまで、教師、トレーナー、メンターとして若い人たちと働いてきた経験があるが、今回のファシリテーターという新しい役目により、若い世代とのコミュニケーションスキルをさらに高めることができた。

2. ジェンダー平等問題

ファシリテーター：Mr. Eugene Cubilla Sosing(クイーンズランド大学国際開発プログラム学部プログラム担当スタッフ)
PY：18名

(1) ディスカッション分野

ジェンダー平等問題 - 平等とエンパワメント

(2) ディスカッションの目標とねらい

目標

ジェンダー平等問題への対処に当たって参加青年の間で理解を深め、スキルを涵養する。平等やエンパワメント、国際化した社会におけるジェンダー平等問題の持つ課題や機会に関係した事柄を扱い、現実的な行動計画を提案する上で参加青年が積極的な役割を担えるように導く。

ねらい

- a. ジェンダー・ロールがどのように形作られ、開発の各種取組に対してどのように影響するか、国際連合の掲げる持続可能な開発目標(SDGs)との関わり及び世界的なパンデミックの時代において、地場そして国際的な観点から認識する機会を参加青年に与える。
- b. ジェンダーのインターセクショナルリティ(交差性)、またそれが個人のジェンダー・レンズにどう関わるかを参加青年間で明らかにする。
- c. ジェンダー平等問題に対処する上で、明確に

設計された、素早く現実的な計画を立てるために必要なコミュニケーション、協調性、プロジェクト・マネジメントや優先順位付けといったスキルを養成する。

- d. 取り扱うジェンダー平等問題に向けた現実的な行動計画を立案できるようになる。

(3) 事前課題

個人課題

各参加青年は、事前課題のテンプレートに沿って、「ジェンダーと開発」についての自身の関与、知識、期待、考えを共有した。個人課題は、コース・ディスカッション I において使用した。

国別課題

参加青年は参加国ごとに、自国や自らのコミュニティにおける「ジェンダーと開発」に関する取組の優良事例を一つ挙げ、パワーポイントで紹介した。事例としては、参加青年が直接関わっている取組、もしくは地域の組織や、行政のプロジェクトを取り扱うこと。この課題は、コース・ディスカッション II で用いた。発表は、Pecha Kucha (ペチャクチャ) 形式で行われた。この形式では、1スライド当たり1枚の図画を見せ (合計5図画)、全体で5分間の発表を行った。発表内容は以下を含んでいること。

スライド1：表紙 - 組織および取組の名前

スライド2：ジェンダーに関する問題

スライド3：実行の目的および活動内容

スライド4：成果・結果

スライド5：実行における課題

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Mr. Nery Ronatay・国連女性機関、女性・平和・安全保障部門プログラム・アナリスト、国連平和大学客員教授

要旨

絵を見てそれが男性に関するものか女性に関するものかを考えるクイズから活動が始まった。講演ではジェンダーの理論や概念、SDGsとの関連性についての議論が取り上げられ、ジェンダーの平等を達成するための国際的な手段として、国連婦人の地位委員会 (1946年)、北京行動綱領 (1995年)、女子差別撤廃条約 (1979年)、女性・平和・安全保障に関する安保理決議第1325号 (2000年) について

も言及された。

基調講演から学んだこと

- ジェンダーとは社会的な産物であり、我々はそれを再構築する必要がある。
- ジェンダーを二元論で語るのではなく、よりきめ細かい考え方をすべきである。
- 平等な扱いをするだけでは格差の是正とはならない。
- 不平等な扱いや差別は、時に、性別、人種、階級、国籍、所得など、複数の社会的カテゴリーの組み合わせに関係している。

コース・ディスカッション I

ねらい

- ディスカッションにおいて、参加青年との関係を築き、親密になるような空気づくりをする。
- ジェンダーと開発に関する基本的な概念や理論について議論する。

活動

- 参加青年は、コース・ディスカッションのテーマに対する各自の理解、期待、背景、経験について班に分かれて話し合い、その後全体に戻って共有を行った。ここで、個人課題を用いた。
- ジェンダーとは何を意味するか、その包含するところや、女らしさ、男らしさ、固定観念や分析、インターセクショナルリティ (交差性) などジェンダーを取り巻く要素を理解する重要性について議論した。

成果

- 生活圏の文化や経験、社会によって無意識に影響されているジェンダーに関する固定観念やバイアス (女性は家事をすべきなど) が存在している。
- 参加青年が身を置く地域社会、仕事や勉強している分野での個人的な経験から、ジェンダーにまつわる固定観念がいかに顕著であり、またジェンダー平等がいかに重要かが明らかになった。

コース・ディスカッション II

ねらい

- 社会経済的、また政治的なやり取りのマイクロおよびマクロな観点に見られる「ジェンダーと開発」の取組について議論する。
- 「ジェンダーと開発」の取組に関する優良事例

について発表する。

活動

- a. ジェンダーに関するよくある問題や、いかに制度、衛生、政治、経済、環境などの諸相がSDGsに関連しているかを議論し、発表した。
- b. 参加国別に「ジェンダーと開発」の取組に関する優良事例を発表した。ここで、国別課題を用いた。

成果

- a. 「ジェンダーと開発」に関する概念や、SDGs目標5番目の「ジェンダーの平等を達成し、全ての女性と女性のエンパワメントを図る」、世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数及び「ジェンダーと開発」に対する戦略について学んだ。
- b. ジェンダーに関する問題の深刻度や優先度は国によって異なること、また様々な取組が行われているが、まだ目の前には課題があること、そして問題解決にはプロジェクトの「質」について考える必要があることを学んだ。

コース・ディスカッションⅢ

ねらい

- a. 「ジェンダーと開発」を促す上での青年の役割を左右するような課題や機会についてのアイデアを生み出す。
- b. ジェンダーに関する諸問題やそれへの介入について優先順位を付ける。
- c. 取り上げたジェンダー関連問題に対処し、ジェンダーのエンパワメントと平等を押し進める現実的な行動計画を立案する。

活動

- a. 認識や能力に基づいた実現可能性やインパクト分析についての議論とワークショップが行われた。また、青年の参加度合いに影響し得る機会や課題について議論した。
- b. 対処能力、時間軸、問題の重要性や緊急性に基づいた、優先順位付けの議論やデザイン思考のワークショップを行った。
- c. プロジェクト・マネジメントについて議論し、SMARTの法則を用いたグループ・ワークショップを行った。全体に向けて発表を行い、コース・ディスカッションの成果発表の準備として行動計画を改善するためのフィードバックがなされた。

成果

デザイン思考及び優先順位付けのワークショップでの成果として以下の行動計画が立案された。

- a. グループ1：(他の業界や国における) 建設的な行いやプロジェクト、優良事例を真似る。
- b. グループ2：女性に対して、恐れず学習を進めることを促す特別なオンライン・プログラムを作る。
- c. グループ3：若い女性のためのロールモデルを紹介する。
- d. グループ4：ジェンダーにおける力の不均衡を減少させる。

(5) ディスカッション成果発表

成果発表は、ジェンダーの平等とエンパワメントが基本的人権であるだけでなく、平和で豊かな持続可能な世界の土台として必須であるという考えを提示することから始まった。3回のセッションと基調講演について紹介し、ねらい、活動、学んだことが概説された。発表では、女性の社会参画を増やす上で一人一人が関わり、インパクトを拡大するために、多様性と包括性がジェンダー平等の構成要素として強調された。最後には、グローバルな視野を持ちつつローカル規模の啓蒙活動や共同イニシアティブで何らかの行動を起こすことが参加青年たちに呼びかけられた。

(6) PYの声

- ・ジェンダー平等問題を取り巻く他国の状況に関し、以前に比べて大変多くの事柄を知ることができたように思う。これによって私の世の中の見方は変わり、平等や高い社会的地位に占める女性の割合、女性の安全や自由に関する問題の根深さを認識させてくれた。ディスカッションにおいていくつかの事例が紹介されるまで、他国での女性を取り巻く状況がいかに良好でないか考えも及ばなかった。私はこれまで、女性に関する不当な扱い、安全や平等の問題はこれまでになく注目されていると思っていた。実際にそうではあるものの、他の参加青年の発表や考え、経験、基調講演者やファシリテーターによる発表を聞いて、より多くの行動がなされる必要があると更に認識を強めるに至った。(スウェーデン)
- ・意見交換によって、とても良い結論と解決策を導くことができた。私はジェンダー平等問題について考えると大抵の場合、女性にとって社会がいかに難しく厳しい場所なのかを改めて思い知らされ、苛立ちや無力感にさいなまれるのだが、今回の議論を通じて、現状に対していかに我々ができること

があるかを知ることができた。更に、他国も同様な問題に直面しており、その中でもジェンダー平等問題がよりよく議論されている国があると知ることができた。我々ができることは非常に多いと気付くことができた。(日本)

(7) ファシリテーター所感

ジェンダー平等問題は幅広いトピックであるため、参加青年の関心事と現況との関連性との間でバランスを取ることが求められた。ディスカッションで取り上げたトピックは、ジェンダーの平等とエンパワメントに向けたSDGs目標5に焦点を当てたものとなり、3回のセッションの中身は、参加青年が現在の仕事、学校、コミュニティに当てはまるようなトピックを検討するものとなった。

セッションは、バーチャル環境下ではあるものの、参加青年間で積極的に意見交換がやり取りされることを企図して設計された。初回及び2回目は、現在のジェンダー及び開発を取り巻く戦略についての問題点と気付きの基礎知識を身に着けることに繋がった。これらは、ディスカッションの終盤に向けて、青年による実現可能で現実的な行動計画を立案する

上で不可欠だった。

総括すると、このディスカッション・セッションは、参加青年がジェンダー平等問題を安全で協調的かつ建設的に話し合える場となった。参加青年から寄せられた声によれば、ジェンダーに関する課題や機会について自分たちのコミュニティにおいて話し合い続ける気概が認められる。参加青年たちは、令和3年度「世界青年の船」事業（オンライン）で築いた知識やネットワークを活かして、今後の取組に手と手を携える姿勢でいる。

「世界青年の船」事業において初めてのオンライン開催が成功裡に執り行われたことを、内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、同僚のファシリテーター、統率相談員、参加国の政府、参加青年や既参加青年の皆様に対してお慶び申し上げます。ファシリテーターの一人となれて光栄であったが、私は自らの知識や経験を共有しただけではなく、参加青年からも多くの学びをいただいた。事態が落ち着いたら、願わくは対面で交流し、美しい皆さんの国を訪れたい。Madamo nga salamat! どうもありがとうございました。

3. 経済問題

ファシリテーター：Ms. Aida May Bergado-De Guzman (心理学者、自営コンサルタント)

PY：17名

(1) ディスカッション分野

第四次産業革命（4IR）における青年の雇用

(2) ディスカッションの目標とねらい

世界では約7,000万人の青年が失業・不完全雇用状態にある一方、雇用主側は採用枠を満たせずにいる。この課題は、青年のスキルと雇用者の需要とのミスマッチが拡大していることに原因の一端がある。物理的な資産とデジタル技術の融合が特徴的な4IRが、社会、経済、雇用、そして人々の生活を大きく変える中、このままではこの問題が深刻化するだろう。

2030年までに、世界で18億人もの青年が労働市場への参加に必要なスキルや資格を持たなくなると推計されている。

デジタルを軸とした経済に対応できる次世代の労働者をきちんと育成できなければ、所得格差の拡大、失業増、政府の支出増、人々の移住増加などを招くことになる。

働者をきちんと育成できなければ、所得格差の拡大、失業増、政府の支出増、人々の移住増加などを招くことになる。

(出典：The Global Business Coalition for Education)

国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目標8「すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用及び働きがいのある人間らしい仕事（ディーセント・ワーク）を推進する」を取扱い、このコースでは参加青年が4IRに備えて、自身に最適なキャリアを歩み、より良い生活を送り、それぞれのコミュニティでより活躍できるよう促すことを企図している。

修了時には、参加青年が以下のようになっていることを目指す。

- a. 4IRとそれが青年の雇用へもたらす影響についての知識を得て、青年の雇用に関する最新の

動向と問題を認識する。

- b. 自らの強みが何かを知り、優先順位や志向を明確にすることで、より自信を持って目標設定やキャリアプランの構築ができるようになる。
- c. WIIFMs（自分にとって何の得があるのか）と WROMs（自分に何が求められているか）を知って自分事として関与し、4IRにおける青年の雇用を促進する取組を生み出すことに尽力する。

(3) 事前課題

個人課題

- a. 4IRについての課題図書
- b. 4IRについての動画視聴
- c. 就業準備、ソフトスキル、テクニカルスキル、起業家的スキルに関して、各参加国における青年の雇用についての文献。
- d. 4IRに対して（優先順位と競争優位性の観点から）どれだけ準備ができているかの自己評価。
- e. 自社の社員や就職希望者に共通して必要となる能力とその理由について、リーダー的職位の人事プロフェッショナルに対するインタビュー及びディスカッション。また、インタビューを振り返ったのインサイトペーパー。

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Dr. Karen D. Sacdalan, Rppsy・心理学者、Lee Hecht Harrison Philippines、デ・ラ・サール大学助教授

演題

4IR下の雇用に向けて青年を意識させる

基調講演から学んだこと

- a. 産業や仕事の状況は急速に変化しており、我々は準備として常に自身と労働市場について見つめる必要がある。
- b. 4IRで必要とされるスキルは、業務に対しての準備具合、ソフトスキル、テクニカルスキル、起業家精神の四つであり、我々にとって、より就職を容易にし、ディーセント・ワークを手に入れられるようにするためには、これらを身につけることが必要である。
- c. 本当に自分に合ったキャリアを構築するためには、以下3点に沿う必要がある。1点目は、デジタル化の中で時間や優先順位を見直す「再想像」。2点目は、最も価値のある知識や、最

も必要とされるスキルや価値は何かを見極める「再認識」。3点目は、就職活動やビジネスチャンスに成功裡に迎えるための計画を（再）始動する「再更新」である。

コース・ディスカッション I

4IR及び4IRが青年の雇用に及ぼす影響

ねらい

- a. 4IRについての理解を深める。
- b. 4IRが青年の雇用に与える影響を知る。
- c. 青年の雇用に関する最近の問題や動向を知る。

活動

- a. アンケート、雰囲気作り、アイスブレイキング、自己紹介
- b. 本コース・ディスカッションに期待していることの擦り合わせ、共通ルール作り、ディスカッション導入
- c. 4チームに分かれてのワークショップ：4IR下での雇用についてのSWOT分析
- d. ワorkshopでの成果についてのグループ発表
- e. 本日学んだことの共有
- f. まとめ

成果

- a. 参加青年は、雇用という文脈における自らの強み、弱み、機会、脅威を認識でき、4IRについての理解を深めた。
- b. 参加青年は、SWOT分析を用いて批判的思考力を高めることができ、その結果として、4IRが自分たちの雇用に与える影響について洞察することができた。自分を磨く継続的な学習が最重要点であった。
- c. 参加青年は、自分たちの強みと機会、弱みと脅威について更に話し合い、記録し、分析することで、どのような強みをいかし、弱みを強化し、脅威を排除し、あらゆる機会を探るべきかをより明確にすることができた。

コース・ディスカッション II

キャリア設計

ねらい

- a. キャリア上の競争力を測る
- b. 個人的・職業人的な志向に基づく優先順位付け
- c. 4IR下における雇用という文脈におけるキャリア・ロードマップ作り

活動

- a. アイスブレイキング、アンケート、雰囲気作り
- b. 前回の復習 -新しい発見や振り返り、気づき
- c. キャリア設計、また参加青年たちによる人事プロフェッショナルへのインタビュー結果のまとめについて、ファシリテーターによる講義
- d. 競争力、優先順位、志向について、個人評価に基づいた小グループでの共有及び議論
- e. 個人のキャリア・マッピングについての小グループでの共有及び議論
- f. 小グループでの議論の成果を全体で共有
- g. ファシリテーターによる講義とまとめ
- h. 個人で得られた学びの共有

成果

- a. 参加青年は、自身の競争力、優先順位、志向（個人的、職業的）に関するプロフィールを作成し、キャリアを選ぶ際に重要となる自分のキャリア上の資産に関する分析を深めるのに役立った。
- b. 参加青年たちは自身のロードマップを作成し、将来の職業人生に向けた詳細な道筋を描くのに役立った。そして現実的な短期及び長期のキャリア目標を設定し、その達成に必要なスキルやリソースを手にするための道筋を描く一助とした。このように、自分自身のキャリア・デザインを行った。

コース・ディスカッションⅢ

まとめ（行動、行動計画、意識向上に向けたキャンペーン）

ねらい

- a. 4IR下の雇用に向けた必要な段取りを踏む。
- b. 全ての回から学んだ内容をまとめ、行動計画、取組、意識向上に必要な関わり方を起案できるようにする。
- c. ディスカッション・セッションにおける学習とパフォーマンスを評価する。

活動

- a. ワークショップ・グループ活動：4IRにおける青年の雇用という領域で、「自分にとって何の得があるのか」と「自分に何が求められているか」を知り、自身のキャリア目標を達成するための行動を打ち立てる。
- b. ワークショップ・グループ活動：グループの行動計画及び取組。

- c. #YOUTHfor4IR：「気付こう、やってみよう、関わろう」というコースのキャッチフレーズを用いて、他の青年や関係者に向けた意識向上キャンペーンを起案する。
- d. ワークショップでの成果をグループで発表する。
- e. メンチメンターというツールを用いた、所感・主要な学びの振り返り。
- f. ファシリテーターによる講義とまとめ
- g. 総括

成果

- a. 参加青年は、自らの「自分にとって何の得があるのか」と「自分に何が求められているか」を明らかにした。これはすなわち、参加青年の行動（何をやめ、何を続け、何を始めるべきか）と、キャリア目標の実現と雇用（自営業、起業家、他者に雇用されるなどの形態を問わず）を確かなものとするための原動力だが、その結果、参加青年の多くが起業家精神の旺盛な傾向にあることが分かった。
- b. 参加青年は、4IRにおいて雇用とディーセント・ワークのために何をどのように準備すればよいかを知った上で、それぞれのコミュニティでより適切な存在となるための取組に重点を置いた行動計画を作成した。
- c. 参加青年は、#YOUTHfor4IR：「気付こう、やってみよう、関わろう」というコースのキャッチフレーズを用いて、他の青年や関係者に向けた意識向上キャンペーンを起案した。こうしたことが、4IR下で自身の思い描いたキャリアを実現する際の問題や懸念に向き合うことを促すのに繋がるだろう。

(5) ディスカッションの成果発表

全3回のセッションを終え、参加青年たちは、次のような学びを得た。

- a. 自身のキャリアを再考する機会を得た。
- b. 4IR下の雇用という話題で、異なる視点や考えを共有することにより、勇気付けられ、楽しむことができた。
- c. 今後のキャリア目標達成に必要なスキルやリソースを習得する意欲が湧いた。
- d. 自分のキャリア上の競争力、優先順位、志向を把握した上で、起業や自営業に踏み出す後押しを得た。

(6) PYの声

- ・この事業で、自分のキャリアをより深く見つめ直し、学び続けなければならないと思った。多くのことを学んだと共に、世界中からの参加者やファシリテーターに励まされた。(日本)
- ・ものの見方や意見を交換することによって何が生まれてくるかを、とても楽しむことができた。トピックに対する理解、そしてさらに重要な相互理解を深めることができた。(スウェーデン)
- ・この事業を通して、コロナを言い訳にせず、自分ができることを精一杯やっていきたいと感じた。(日本)
- ・これからも学び続け、スキルを身に付けたいと参加者の多くが話していたことに驚き、私の大きなモチベーションとなった。(日本)
- ・異なる話題で異なる視点を共有する良い機会となった。新しいことをたくさん学ぶことができ、一連のディスカッションをとても楽しむことができた。(スリランカ)
- ・参加者のさまざまなキャリアパスを聞くことで、自分の進むべき道を改めて考えることができた。(日本)
- ・この事業で4IRに関する知識を得て、勇気付けられた。(南アフリカ)
- ・この事業に参加する前はコロナ禍で狭い視野だったのが、改めて世界の広さを感じた。今後は、多くの人と交流し、新しい着想を得ていきたい。(日本)
- ・起業家となって事業を興したい。(日本)
- ・大満足！やる気が出た！とても楽しかった！(ポーランド)
- ・経済というテーマを選んだ時、大学のように退屈になるだろうと思っていた。しかし、触発される情報を目の当たりにして驚くこととなり、将来に向けて計画を立て、考えていこうと思う。自分のキャリアについて考え直すいい機会になった。(オマーン)

・最高のディスカッション・セッションだった。(オーストラリア)

(7) ファシリテーター所感

令和3年度「世界青年の船」事業(オンライン)は実に充実した経験となった。世界各地から集まった現代の青年たちに耳を傾け、彼ら彼女らがこのデジタル化の時代に社会により大きな影響を与えることができ、自分に合い、自分の可能性を最大限にかせるキャリアに向けてどう準備しているかを目にすることは、私自身の視野を広げてくれた。参加青年が、この学びの旅で得たエネルギーと情熱を持ち続け、それぞれのコミュニティに戻って、より重要な存在となることを祈念している。

この事業は、参加青年とファシリテーターに対して土台を提供し、適切なコミュニケーションを確保することで、とてもよく運営されていた。非常に練られた実施計画があったことが、事前研修でのミーティングや活動、コース・ディスカッション後の運営事務局との振り返り、そしてコース・ディスカッションの成果発表などにも表れていた。日本参加青年の繋ぎ役を各コース・ディスカッションに配置したことは、参加青年間のコミュニケーションにおける大きな助けとなった。また、内閣府と本事業の事務局スタッフが常に伴走してくれたことは、我々ファシリテーターにとって心強いサポートとなった。

令和3年度「世界青年の船」事業(オンライン)に参加する何年も前に私は「東南アジア青年の船」事業の参加青年であり、その後ファシリテーターも務めたことがある。未来のリーダーを育成するこの事業に再び参加し貢献することで、世の中に変化を生み出し続ける機会を与えてくださり、内閣府の皆様には感謝申し上げたい。皆様の一致団結した努力に対して、頭が上がらない。是非、この事業の火を絶やさず灯し続けていこう。

4. 環境問題

ファシリテーター：Dr. May Ali Khalfan (バーレーン大学工学部建築・インテリアデザイン学科助教)

PY：20名

(1) ディスカッション分野

本コースは全体として環境問題に関する分野を

扱った。人類は地球上の多くの資源を利用しており、それらの資源への日々の需要と世界の人口増加が

相まって、破壊的な不均衡状態が生まれてきた。気候変動は、様々な形で見られるようになったその状態の一つの表れである。コース・ディスカッションの中で参加青年たちは、持続可能な開発目標(SDGs)に含まれる環境関連の以下の3つの目標について考察し、議論した。a) 気候変動に具体的な対策を、b) エネルギーをみんなにそしてクリーンに、c) 住み続けられるまちづくりを、である。

(2) ディスカッションの目標とねらい

参加青年は、このコースを通して以下のことを習得する。

- a. 基調講演を通したSDGsの内容と重要性についての理解。
- b. ディスカッション・セッションを通した3つの目標に関する集中的な考察。
- c. 事前課題への取組とコース内でのやり取りを通した知識の習得と共有。各参加青年は、それぞれの国における環境問題への取組について発表する。これによって、参加青年はまずディスカッションのトピックを理解し、自分の国でどのような対策がなされているかについて考察するとともに、他の国々での取組との差異や類似性を知ることができる。
- d. 参加青年は、ブレインストームと新しい解決方法を提案する機会を得る。これによって、扱っているテーマについての思考方法を広げることができるとともに、一人一人が環境問題にどのように取り組むことができるのかを知ってエンパワーされることになる。

(3) 事前課題

個人課題

参加青年には、各ディスカッションの前に課題が出され、グーグルフォームを使ってオンラインで提出するよう指示された。さらに、ディスカッションの前に自由に読むことのできる参考資料も事前配布された。コース・ディスカッション I の事前課題は、a) それぞれの国における気候変動の影響を調べる、b) それらの影響に対して、どのような対策が取られているかを列挙する、というものであった。コース・ディスカッション II の事前課題では、グループごとに指定されたケーススタディを読み、各自以下を提出した。a) ケーススタディに対する個人的な考察、b) 自分の国における現在と将来のエネルギー源について調

べたもの。コース・ディスカッション III の事前課題は、各自の住む都市の現状について、以下の項目でマインドマップを作成することであった。近隣地域の特徴(道路のサイズ、歩道の設置状況、建物の密度と高さ)、オープンスペース(公園、庭園、緑地)の存在、人々の交流、交通、生活に必須なモノやサービスが近くで手に入るか。マインドマップに書く内容と見本が、事前に参加青年に提示された。

(4) 活動内容

有識者による基調講演

氏名・所属：Dr. Maysoon Nedham Awadh・バーレーン大学理学部生物学科助教授

要旨

基調講演は5つのパートで構成された。パート1は、SDGsの成り立ちや重要性、柱となること、そして目標間の関連性についての全体的な情報であった。パート2は、SDGsの中の環境に関連する5つの目標、すなわち「エネルギーをみんなに。そしてクリーンに」、「住み続けられるまちづくりを」、「気候変動に具体的な対策を」、「海の豊かさを守ろう」、「陸の豊かさを守ろう」そして「パートナーシップで目標を達成しよう」が扱われた。パート3では、パート2で扱われた目標に関するバーレーン王国の取り組み例が紹介された。パート4では、最近講演者自身も参加して行われた「Youth response and awareness level of Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標に関する若者たちの取組と意識レベル)」という研究の結果が紹介された。この研究は国連SDGsに対するバーレーン王国の若者の意識レベルを調査したものである。最後のパート5は、二人の若いバーレーン人大学生も加わって、若者たちの行っているプログラムの一つが紹介された。これはブリティッシュカウンシルとバーレーン高等教育省が行っている「アクティブシチズン(行動する市民)」プログラムの一つである。同プログラムでは、若者たちが地球的気候変動への解決策を考え出すよう促している。

基調講演から学んだこと

- a. 今の時代に持続可能な開発目標を取り入れ、活用することの重要性。
- b. 気候変動対策の促進を担う若者のエンパワメント。
- c. 全て目標に取り組むことの必要性和、その中でも気候変動対策が最優先であること。
- d. 気候変動対策は地球上の一部の地域の問題で

はなく、全ての国が取り組むべきものであること。

コース・ディスカッション I

ねらい

- a. 気候変動に関する知識を得る。
- b. 世界中で行われている活動についての体験を共有する。
- c. 個人でできる気候変動対策の案を出す。

活動

- a. アイスブレイキング
- b. 気候変動の影響（動画）
- c. グループ・ディスカッション1：気候変動の影響と各国の直面するであろう課題及び気候変動対策として行われている活動
- d. ディスカッション2：我々は個人としてどのように貢献できるのか。

成果

- a. 参加青年は、気候変動の重大さと、一部の国が他の国と比較して特に被害を受けやすいということについて理解することができた。
- b. 参加青年は、気候変動対策には世界レベルの協力が必要であること、この問題に積極的に対応するために各国が法律や政策を承認し始めるべきであることを認識した。
- c. 参加青年は、個人レベルでも貢献できることを認識した。

コース・ディスカッション II

ねらい

- a. 参加青年が世界で使われている様々なエネルギー源を知ること。
- b. 代替エネルギー源を利用することの重要性に気付くこと。
- c. 気候変動とエネルギー利用を関連付けること。
- d. 代替エネルギー源の利用可能性を評価すること。

活動

- a. 気候変動とそれへの対応として各国で行われている活動についての参加青年からの発表。
- b. 参加各国におけるエネルギーミックス（発電方法の組み合わせ）の状況をワードクラウドを使って見てみる。
- c. グループ・ディスカッション1：ケーススタディについて議論し、持続可能なエネルギー利用を理解する。
- d. グループ・ディスカッション2：参加国における

エネルギーミックスについて検討し、代替エネルギー源利用の可能性を評価する。また、それらの代替エネルギーへの転換に向けてどのような可能性と障害があるかを考える。

- e. グループごとに結果を発表する。

成果

- a. 参加青年は、様々な種類の再生可能なエネルギー源について知識を得た。
- b. それぞれの国での様々な可能性と制約を検討し、それらのエネルギー源の効果や利用可能性を評価した。
- c. 参加青年は、気候変動と非再生可能エネルギーの利用が直接関連していることを認識した。
- d. 参加青年は、クリーンエネルギーへのシフトには世界規模での更なる行動が必要であることを認識した。

コース・ディスカッション III

ねらい

- a. 都市の抱える問題について知識を得る。
- b. 都市における持続可能性とレジリエンスの重要性に気付く。
- c. 知識をシェアして都市の現状を評価する。
- d. 未来都市の意義を考え、視覚化する。

活動

- a. Sustainable Future City（持続可能な未来都市）（動画）
- b. グループ・ディスカッション1：作成したマインドマップをもとに、各国の状況を話し合う。
- c. グループ・アクティビティ2：未来都市を想像し、社会課題や環境問題にどのように対処し得るかを思い描く。
- d. グループごとに発表

成果

- a. 参加青年は、世界の都市の多様性に気付いた。
- b. 参加青年は、気候変動やクリーンエネルギーと持続可能な都市との関係を認識した。
- c. 参加青年は、「住み続けられるまちづくり」の目標に関連する全ての側面に取り組むような未来都市のモデルを思い描くことができた。
- d. 各自の住む都市について話し合う中で、持続可能な都市に必要な社会的な要素についても検討した。

(5) ディスカッション成果発表

5人の参加青年から、環境コースでの学びについて発表があった。発表は、大きくは5つのパートからなっていた。最初のパートは、発表全体の導入と、本コースの重要性、コースの概要、そして発表の要旨をカバーした。パート2、3、4は、各セッションで参加青年の行ったアクティビティやディスカッションに焦点を当てた。パート5では、まとめと締め言葉、そして環境問題コースからの学びが示された。発表者は最後に、出席した人たちが個人としてできる気候変動対策へのインスピレーションを得られるよう、メンチメーターを使って作成されたワードクラウドを紹介した。

(6) PYの声

全体として参加青年は、コース・ディスカッションを楽しんだようである。

- ・コースは役立つ情報がとても多く、参加しやすい雰囲気であり、多くの知識を得ることができた。(オマーン)
- ・環境コースは最初から最後まで楽しかった。問題を異なる視点から見つつ、最後には意見をまとめるのが面白かった。(日本)
- ・コースは楽しかった。ディスカッションや小発表に多くの時間を費やすことができたので、多様な視点からとても多くのことを学ぶことができた。(日本)
- ・コースはとても興味深かった。例えば国連の環境ケーススタディや持続可能な都市プロジェクトなど、私の知らないことがたくさんあった。扱われたトピックがとても面白かった。(ロシア)

今回はオンラインで行われた最初の「世界青年の船」事業となったが、参加青年の大部分は事業を対面の形で開催するよう提言している。

- ・みんなで直接会って、オンラインではなく対面でディスカッションやアイデアの共有を行えば、この事業は非常に有意義なものになるだろう。(スリランカ)

もう一つ多くの参加青年に共通していた意見は、ディスカッションの時間を長くすることと、参加青年全員での導入の日を設けることである。

- ・自己紹介デーのように、お互いを知るための日がディスカッションの前にあると良かった。(日本)
- ・ディスカッションにもう少し時間が欲しい。また、コー

スメンバーとさらによく知り合うための時間があれば、より良いディスカッションができるだろう。(日本)

- ・お互いを知るための時間がもう少しあっても良いかもしれない。(スウェーデン)

コースの構成について見てみると、上にも述べられているように参加青年が最も楽しんだのはディスカッション部分だったようであり、楽しかった活動のもう一つは未来都市についてのディスカッションだったようである。

- ・チームメンバーとのコミュニケーションがコースで一番楽しい時間だった。(日本)
- ・最後のセッションで行った、未来の都市を想像してみるアクティビティが楽しかった。(日本)

(7) ファシリテーター所感

私は「世界青年の船」事業の既参加青年なので、ディスカッションコースのファシリテーターに選ばれ、この素晴らしい事業に再び参加できることになった時は心から嬉しかった。参加青年だった時の経験は、周りの世界に目を開かせてくれるものだった。学びと世界各国からの青年たちとの語り合いが自分に自信を持たせてくれ、違いを認め、寛容さを学び、世界の様々な課題を知る機会となった。今回のディスカッションコースを通して、参加青年とともに私自身も学びを得ることができた。学术界に身を置き、日頃は教師として教える形の思考に慣れているので、このコースではディスカッションを通して教育するという異なる手法に接することができた。私の役割は、事前課題とディスカッショントピックの選択を通して学びの場を作ることであった。参加青年は積極的にディスカッションに参加していた。また、フィードバックを見ると、参加青年がコースを楽しみ、お互いから学び合ったことが分かる。学びの旅は終わりの無い旅である。今は、マウスのクリック一つで容易に情報を得ることができる。必要なのは、その情報を正しい方向に導くことだけだ。所感を締めくくるに当たり、私はこの事業がオンラインという難しさを抱えながらもその目的を果たしたと考えている。参加青年は、世界規模の友人のネットワークを作り始めており、地球の他の部分で何が起きているのかを知るようになっている。そして参加青年たちは、自分たちが変化をもたらすことができるということをこれまで以上に認識しており、これこそが「世界青年の船」事業の真髄であると言えるだろう。